

Ⅲ 研究のあゆみ

1 研究主題・副題

生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる体育科学習の在り方
～「体づくり運動」における主体的・対話的な授業の展開～

2 主題設定の理由

現在、我が国日本は、グローバル化や少子高齢化による生産年齢人口の減少、人間関係の希薄化など多くの問題を抱えている。その社会の変化の中で、様々な問題に対して長期的な見通しをもって、主体的に社会にかかわり、解決に臨むことが求められている。2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催も間近に迫り、日本国民の体育・スポーツへの関心は更に高まってきている。また、日本社会における健康意識の高まりを受けて、健康食品や様々なダイエット法などが示されるようになってきている。しかし、一方でITの急速な進化を受けて、雇用形態の多様化が進み、健全な生活習慣や食習慣が保たれない状態にもなっている。

このような課題を受けて、児童は多様な変化の中、主体的に問題にかかわり、他者との話し合いを通して、新たな価値あるものを創造していく力が求められている。

東臼杵地区は、門川町、美郷町、諸塚村、椎葉村の4つの小学校体育連盟が集まって構成されている。多くの小学校が小規模であり、自然に囲まれ、児童は温かい人間関係の中で育ってきている。その一方で、近くに公園や運動施設がなかったり、バスや車の登下校で日常的に運動不足に陥ったりしている。また、スポーツ少年団などの活動も各校でばらつきがあり、特にスポーツ少年団がない山村地域の小学校では、学校以外での運動をする機会がほとんどないのが実情である。そのため、運動能力の二極化が児童間で広がっている地区もあり、運動の機会が極端に少ないまま大人になってしまう可能性もある。人間形成において重要な時期である小学校段階に、運動に親しむ資質や能力の基礎を形成することは生涯にわたってスポーツに親しみ、健康な生活を送る上で大変重要である。

東臼杵地区では、研究主題を「生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる体育科学習の在り方」とし、4つの町村それぞれの小学校で児童や学校、地域の実態に応じて副題を設定し、研究に取り組んできた。

そこで、各学校での取組を継続させながら、児童がより主体的に運動にかかわり、対話的で深い学びを実現するための手立てを講じ、健やかな心と体を育み、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てることにつながるのではないかと考え、本主題を設定した。

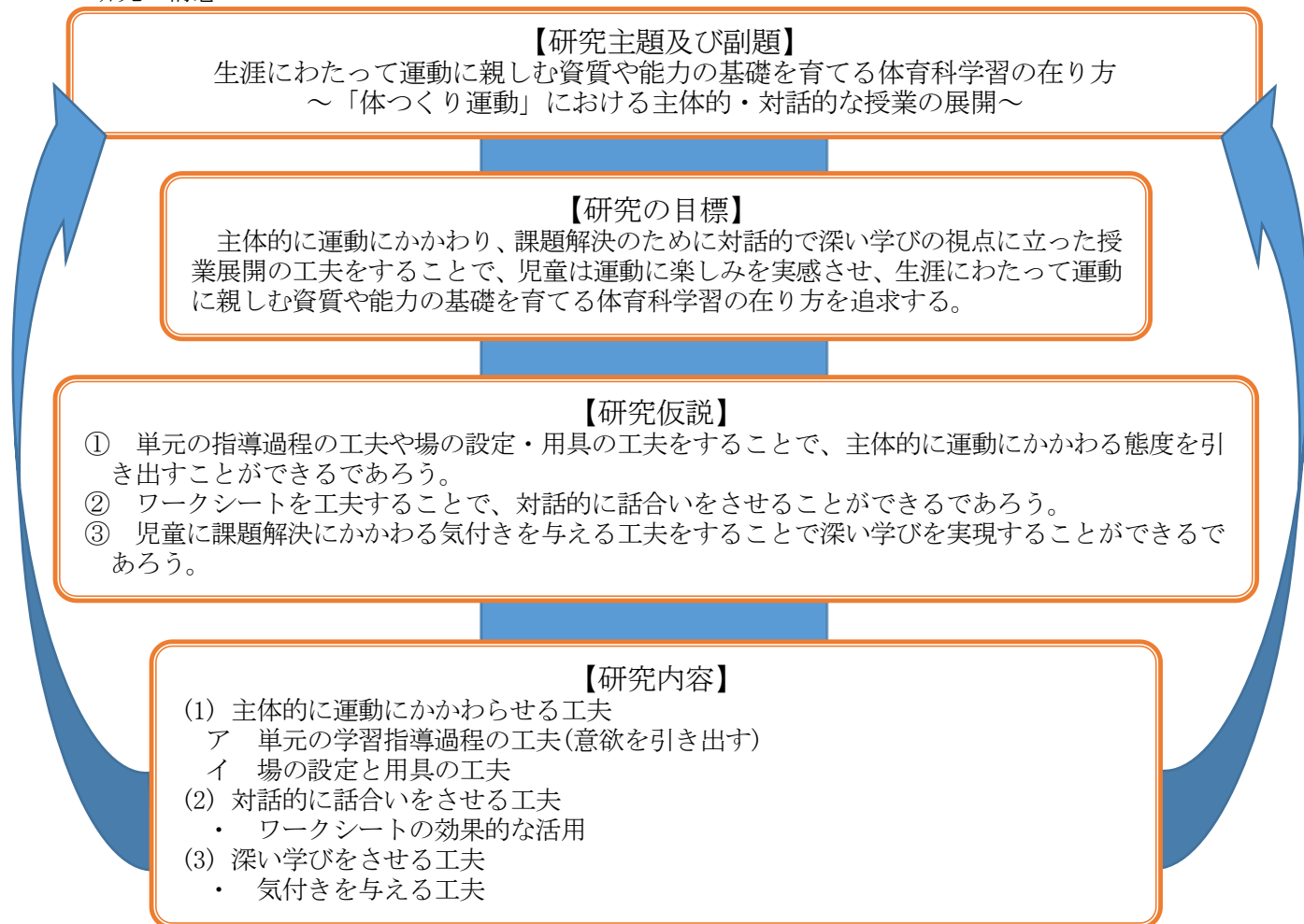
3 研究の目標

主体的に運動にかかわり、課題解決のために対話的で深い学びの視点に立った授業展開の工夫をすることで、児童は運動に楽しみを実感させ、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てる体育科学習の在り方を追求する。

4 研究の仮説

- ① 単元の指導過程の工夫や場の設定・用具の工夫をすることで、主体的に運動にかかわる態度を引き出すことができるであろう。
- ② ワークシートを工夫することで、対話的に話し合いをさせることができるであろう。
- ③ 児童に課題解決にかかわる気付きを与える工夫をすることで深い学びを実現することができるであろう。

5 研究の構想



6 研究の実際

(1) 主体的に運動にかかわらせる工夫

ア 単元の学習指導過程の工夫(意欲を引き出す)

運動に主体的に関わろうとする意欲を引き出すため、ねらい1・2で技の難度を高めるようにする。ただし、難度については、各グループやペア、個人の能力に合わせて行わせる。

第1時	第2時～第4時	第5時～第7時	第8時
・運動のねらいを確認しゴールイメージを持たせる	ねらい1 運動のやり方を知り、仲間と運動のポイントを伝え合う ・ 動きのコツ ・ 工夫する視点 ・ 全員共通の運動とグループやペアの選択運動 ・ 対話的な話し合い	ねらい2 自分や友達の課題に合わせて、工夫して運動に取り組もう。 ・ 「長縄プラス用具」の運動 ・ グループでの選択運動 ・ グループで工夫 ・ 対話的な話し合い	ねらい3 運動の工夫を友達に伝える発表会をしよう

ねらい1では、基本的な運動を中心に学習を進め、ねらい2では、ねらい1で学習した事を生かしながら「長縄プラス用具」をメインにグループや個人の能力に合わせた工夫を行い、運動をしていく。

イ 場の設定と用具の工夫

「巧みな動きを高める運動」を中心に場の設定を行った。毎時間準備運動の後に基本の運動として、ラダーやミニハードル等を使ってリズムカルにタイミング良く動くことを意識した運動を考えさせた。ま



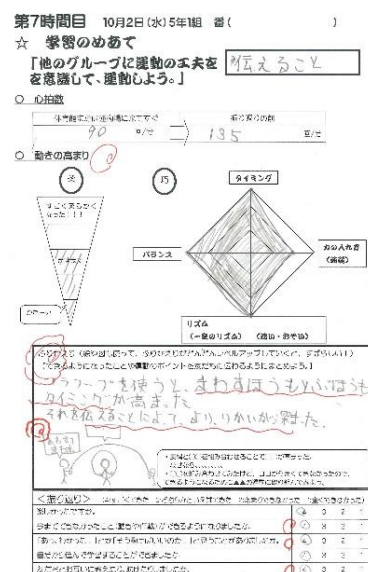
た、「長縄プラス用具」では、大小のボール、フラフープ、学級にあるガムテープ、平テープ等も準備した。長縄を片足で跳びながらボールをキャッチ。フラフープで跳びながら長縄を跳び。二人で長縄を跳びながらボールをパスし合う。左の手の平にガムテープを載せて長縄を跳ぶ等、用具を上手に活用し、工夫しながら運動を楽しんでいた。



(2) 対話的に話し合いをさせる工夫 (ワークシートの効果的な活用)

補強運動や自身の心拍数等は、こまめにワークシートに記入させた。動きの高まりについては、レーダーチャートを活用し、できた項目とそうでない項目を一目で分かるようにするとともに、前時との比較も容易になった。

その結果を見比べることで、個人の振り返りだけでなくグループとしての工夫や課題についても考え話し合いをさせた。



(3) 深い学びをさせる工夫（気づきを与える工夫）

グループ内で、声かけとともに具体的なアドバイスをを行い、全員で支援しながら運動するようにした。まとめの時間には、グループごとに発表の時間を設定した。発表の際には①運動のコツ②仲間に行ったアドバイスを発表することにした。そうすることで、学級全員が具体的に分かりやすく気付くことができ、学びを深めることができた。

児童の運動能力やコミュニケーション等の実態を考慮して、教師が意図的にグループ割りを行った。運動が得意でない児童もコミュニケーションが苦手な児童も周りの声かけや運動へのアドバイスを受けることによって、意欲を持って段階的に難度を上げた運動に少しずつ取り組めるようになり、運動の楽しさに気付くことで個人の深い学びにもつながった。

7 まとめ (成果と課題)

(1) 成果

- 「主体的・対話的で深い学び」について定義やイメージ図を確認し、単元計画や学習指導過程の工夫等を行うことで、児童が意欲的に運動に取り組むことができる「体づくり運動」の授業を構築することができた。
- ワークシートの活用により、一人一人の授業に対する満足度や課題を明らかにすることができ、グループ内での話し合いも活発になった。また、教師自身の指導の振り返りにも効果的であった。
- 少人数学級である利点を考慮し、個人の気付きと学級全体の気付きを与える工夫を行うことで意欲的に取り組む姿が見られた。

(2) 課題

- 「2 学年にわたって指導するもの」となっているので、6 年担任との連携を進め、指導計画や評価基準の見直し、授業の在り方の研究を更に深めていく。
- この研究を先生方の困り感解消にどのようにつないでいくかが課題である。